

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教 育 学 ）	氏名	林 韻
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p>日本語学習者の文章聴解時の空間的状況モデルの構築における視空間作動記憶の働き —二重課題法を用いた実験的検討—</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p>主 査 教 授 松 見 法 男</p> <p>審査委員 教 授 松 本 仁 志</p> <p>審査委員 教 授 宮 谷 真 人</p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本論文は、上級の日本語学習者を対象とし、視空間的情報を含む第二言語としての日本語の聴解過程を実験的に検討したものである。具体的には、Baddeley (2000) の作動記憶 (working memory: 以下, WM) 理論を基に、文章聴解時の空間的状況モデル (spatial situation model) の構築における視空間 WM の働きを調べた。実験では、Anderson (1985) による聴解の3段階モデル (以下, Anderson モデル) に沿って、母語の文章聴解との比較を行った。併せて、リスニングスパンテスト (listening span test) の得点を言語性 WM 容量の指標として用い、空間的タッピング課題 (spatial tapping task) を視空間 WM の機能を妨害する二重課題として採用した。</p> <p>論文の構成は、次の通りである。</p> <p>第1章では、聴解の過程と文章の記憶表象に関する先行研究を概観し、空間的状況モデルの概念を取り上げ、その特徴と構築過程に関する知見を吟味した。本研究の枠組みとなる Baddeley (2000) の WM モデル及び Anderson モデルについて説明し、文章聴解時の空間的状況モデルの構築における WM の働きを論じた。そして、先行研究で未解明な点を指摘し、本研究の研究課題を提示した。</p> <p>第2章では、研究課題に沿って7つの実験を行い、文章聴解時における視空間 WM の働きを調べた。</p> <p>予備実験1では、相関分析により、言語性 WM 容量と視空間 WM 容量を独立した個人差要因として扱うことの適切性を確認した。予備実験2では、日本語の文章聴解における視空間 WM 容量の影響について検討した。視空間 WM 容量が視空間的情報を含む文章の理解と記憶に寄与する結果が得られなかったため、言語性 WM 容量を個人差要因として設定し、視空間 WM 容量を同等レベルに統制した上で、視空間 WM の機能を妨害する二重課題としての空間的タッピング課題の種類を操作することを提案した。</p> <p>実験1では、文章に含まれる視空間的情報の有無を操作し、日本語の文章聴解における空間的タッピング課題の影響について検討した。母語話者を対象とした先行研究と一致した結果が示され、言語性 WM 容量の大小にかかわらず、視空間的情報を含む文章のみにおいて、空間的タッピング課題による妨害がみられた。</p>			

実験 2 と実験 3 では、空間的状況モデルを構築する意味表象のモダリティの観点を取り入れ、母語の聴解との比較を通して、第二言語の聴解における空間的状況モデルの構築時の視空間 WM の働きを検討した。実験 2 では筆記自由再生テストを用い、実験 3 では地図作成テストを用いた。実験 2-1 と実験 3-1 では学習者の母語（中国語）の聴解を扱い、実験 2-2 と実験 3-2 では学習者の第二言語（日本語）の聴解を扱った。その結果、母語でも第二言語でも、テストの種類と聴き手が持つ言語性 WM 容量の大小によって、空間的タッピング課題による妨害の生じ方が異なることがわかった。聴解における空間的状況モデルは、時間軸に沿って言語表象とイメージ表象が、それぞれ言語性 WM と視空間 WM の働きによって順次、形成され、WM 内のエピソードバッファで関連づけられる。ただし、母語の聴解では、言語性 WM 容量の大小にかかわらず、言語表象とイメージ表象が並列的に構築されるが、言語性 WM 容量の大小によって空間的状況モデルの形成度が異なる。他方、第二言語の聴解では、言語表象とイメージ表象の並列的な構築が言語性 WM 容量に制約され、言語性 WM 容量の大小によって空間的状況モデルの豊富さが異なることがわかった。

第 3 章では、実験 1 から実験 3 までのまとめを行った。第二言語としての日本語の聴解における空間的タッピング課題の影響、並びに Anderson モデルの各段階に沿った上級日本語学習者の聴解過程を提案し、言語性 WM 容量の大きい学習者と小さい学習者の特徴を総合的に考察した。そして、本研究の意義、日本語教育への示唆、今後の課題を述べた。

本論文は、次の 3 点で高く評価できる。

1. これまで未解明であった日本語学習者の文章聴解における視空間 WM の働きについて、複数の実験を体系的に行い、言語性 WM の働きとの関係について検討した点である。第二言語の聴解メカニズムを視空間 WM の機能の観点から調べた研究は、管見の限り見当たらない。本研究の結果から、視空間的情報を含む文章の聴解における WM 内の言語処理に関する各構成要素の機能が明らかとなり、それらの働きが聴解過程の各段階で異なることが推察された。
2. Baddeley (2000) の WM モデルと Anderson モデルの融合を試み、上級の日本語学習者における視空間的情報を含む文章の聴解過程を明らかにした点である。第二言語の文章聴解における学習者の認知過程を解明することは、聴解力を向上させるための有効な指導方法を、理論的根拠とともに提案することに繋がる。
3. 文章理解時の言語性 WM と視空間 WM の並列作業に着目した研究の発展に寄与する、新たな実験方法を考案した点である。従来、文章理解における言語性・視空間 WM の働きを検討する研究では、相関分析、または双方のいずれかを妨害する二重課題法が主に採用されてきた。本研究では、言語性 WM 容量を扱うと同時に、空間的タッピング課題を二重課題として採用した。第二言語の聴解において、言語処理の効率性を反映する言語性 WM 容量の大小により、視空間 WM の働き方が異なることが示唆された。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和 4 年 2 月 14 日